

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26370237

研究課題名(和文) 近世京都商家の文事と文化交流の基礎的研究 柏原正寿尼の和歌と生活を中心として

研究課題名(英文) Fundamental Studies on Literary Matters and Cultural Exchange of Merchants in Early Modern Period Kyoto: Focusing on Waka and the Life of Kashiwabara Shojuni

研究代表者

田中 仁 (TANAKA, Hitoshi)

鳥取大学・地域学部・名誉教授

研究者番号：80217067

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)： 洛東遺芳館には、柏原家の人々の生活と柏屋の商業活動の中から生み出された、近世初頭から昭和にかけての多様な文物が保管されている。そこで、研究期間を通じて、その中から研究課題に直接かかわる資料をさがしだすことに努めた。その資料は、次の二つに大別できる。(1) 柏原家初代浅真、六代目内室米寿尼、七代目正寛・正寿尼夫妻、八代目祐真・寿真夫妻などの柏原家の家族の文事にかかわるもの、(2) 柏原家へ姻戚の吉田家、那波家、岸部家、三井家からもたらされた文物。本年度までに確認できた(1)(2)の全資料を通覧して、その目録を作成し、柏原家・柏屋(かしわばらけ・かしわや)の生活と文化にかかわる年譜を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

商家の文化の研究は、公家や大名家・武家に比べて、従来盛んではなかった。しかし、本研究により、近世期の商家には、各家、各代、特徴のある文学的活動があったことを確かめることができた。その伝統は現代まで継続している。逆に言えば現代の企業、財界の文学的活動を近世から見直す視座を得ることができた。もう一つ、近世期の和歌は詠者の実生活とは別種の世界のように見えるが、詠者の生活と人物像を子細にみてゆけば、題詠歌にもそれが反映している場合が多々あることを確かめることができた。これは近世期の和歌、特に題詠を研究する場合、詠者の生活や人柄を捨象することの是非を問い直す手がかりが得られたのも、本研究の成果である。

研究成果の概要(英文)： In Rakutoihokan, there are kept various cultural assets, yielded from the lives of the Kashiwabaras and the commercial activity of Kashiwaya in the early Edo era to the early Showa era. I have tried to locate the documents related to the literary matters and the cultural exchange of Waka and the life of Kashiwabara Shojuni. The documents can roughly be divided into the following two: 1) The documents related to the literary matters of the Kashiwabaras, namely the first Kashiwabara Senshin, the wife of the sixth, Eijuni, the seventh Shokan and his wife Shojuni, and the eighth Yushin and his wife Jushin. 2) The cultural assets brought to the Kashiwabaras from the relatives by their marriage, namely the Yoshidas, the Nabas, the Kishibes, and the Mitsuis. I made a catalog of all the above materials which I surveyed up until this year as well as a chronological list of lives and the cultural history related to the Kashiwabaras and Kashiwaya.

研究分野：日本古典文学

キーワード：近世商家 文事 文化交流 生活 和歌

## 1. 研究開始当初の背景

商家の文書の研究は、公家・武家に比べてはなはだしく遅れている。文人を輩出した三井家の所蔵資料も、現在までに刊行されているのは「三井文庫史料叢書」等の「史料」であり、『三井家文化人名録』(2002年、三井文庫)も、文事についての記述は個々の当主にまつわる挿話といった程度にとどまっている。

しかし、いわゆる豪商はもちろん、ある程度の財力のある商家の元には自ずから諸々の文物が集まるし、それぞれの時代、地域を代表する文人との交流や、遠近の同業者、取引先との交流もある。その結果、商家の主や家族は、それぞれの資質、置かれていた境遇などに応じてその時代、地域の文化を高度に身につけることが可能になる。その結果、和歌・俳諧、漢詩等々を嗜み、文化人として全国的に名をなすにいたった人物も少なくない。商家には、時代と地域の文化を蓄積する条件が備わっている。

柏屋は柏原家の経営する近世後期有数の呉服太物商である。寛永期(1624~1643)の創業以来、現京都市東山区問屋町に本拠を置き、天和2年(1682)以前に江戸日本橋に店を出して、当時の商人が理想とした「江戸店持ち京商人」(京都に本拠を置き、江戸に店を持つ商人)になった。その柏原家・柏屋に伝わってきた文物を保管しているのが洛東遺芳館である。その数量は膨大で、文学関係資料にかぎっても1万点をこえるであろう。

しかし、その研究は未着手といってよい状態にある。柏原家の女性については、林玲子氏の『江戸・上方の本店と町屋女性』(吉川弘文館、2001年)に研究があるが、商家の当主の妻としての役割を考察する、という観点からなされたものであり、文事については触れられていない。柏屋については、賀川隆行氏の『近世江戸商業史の研究』(大阪大学出版会、2012年)があるが、対象は商業活動に限定されており、用いられている資料も帳簿類に限られている。

本研究の研究代表者(田中)は、本研究以前に、科学研究費補助金の交付を得て、洛東遺芳館所蔵の文学関係資料に直接かかわる研究として、「洛東遺芳館所蔵近世後期書簡の研究」(1994~1996。以下「書簡の研究」)、「近世末期京都商家の学問と文事」(2000~2003。以下「学問と文事」)の二つを実施した。「書簡の研究」では、景樹書簡の大部分、正寿尼書簡孫三郎(養嗣子。在江戸)宛等の執筆年次を推定することができた。また、「学問と文事」では、柏原家の蔵書の蓄積に親族である岸部家、吉田家、那波家、三井家との交流が大きい役割を果たしていたこと、柏原家の「学問」の分野が、歌学から国学、漢学、さらに実学へと変化していったこと、正寿尼の和歌の稽古の具体的方法などがわかった。しかし、数々の至らない点もあった。「書簡の研究」によって景樹書簡の執筆年次がわかって、そこに書かれている景樹の歌論その他諸々の見識や思惟は放置したままであった。また、「学問と文事」でとりあげた岸部家ほかの親族との交流、柏原家の学問の変化は、「洛東遺芳館蔵書の蔵書印一柏原印・岸部印」(『鳥取大学教育地域科学部紀要(教育・人文科学)』第5巻第2号 2004年1月)で一部分について詳述し得たほかは、まだ概略を描き得たにとどまっている。

本研究は、こうした点を克服するために構想したものであるが、その構想の背景として、2004年度~2007年度科研費「桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏」、2009年度~2013年度科研費「浄土真宗と和歌 真宗仏光寺派と桂園派の関係を中心として」の研究のために行った、柏原家代々の人々が日常使用していた手許品を収蔵している乾蔵の調査の成果がある(柏原家は本願寺派門徒であるが、正寿尼の師の伴蒿蹊、香川景樹が仏光寺派門主随応の師でもあったことから、仏光寺御堂衆恵岳等の仏光寺派僧侶と親交があった)。乾蔵から見いだされた柏屋・柏原家の出納簿類の調査によって、正寿尼をふくむ柏原家の人々の商家の人としての生

活が次第に明らかになってきた。また、文事と文化交流に関わる資料も予想外に多く見いだされた。調査はまだ修道品の一部にしか及んでいないが、主なものを挙げるなら、正寿尼詠草・和文・書簡下書き等 47 点、景樹点仮綴詠草 8 冊、正寿尼筆伴蒿蹊百人一首講義聞書の一部、八代目柏原孫左衛門祐真(文化 2 年・1805~明治 14 年・1881)の書籍蒐集覚書、大正期の蔵書目録、三井則兵衛(北家七代目高就)・れつ夫妻とその子女たちの正寿尼等柏原家の人々宛ての書簡約 50 通等である。これらの新出資料を、「書簡の研究」「学問と文事」の調査によって見いだされた、主として大蔵、一部は南蔵に保管されていた資料とあわせ見ることにより、柏原正寿尼をはじめとする柏原家・柏屋の人々の生活の実態を明らかにして、商家の生活の一環としてその文事を考察することが可能になると考えた。柏原正寿尼(明和 5 年・1768~天保 12 年・1841)は、柏原家第七代の主である柏原慶章(明和 2 年~文政 3 年)の妻であり、『平安人物志』文化十年版、文政五年版、同十三年版、天保九年版に載っている。柏原家の人々のなかでは歌人としての知名度がもっとも高く、また洛東遺芳館に保管されている文学関係資料も、正寿尼にかかわるものがもっとも多い。さらに、小沢蘆庵、伴蒿蹊、加藤千蔭、香川景樹、小川布淑、大江広海等々、当時の著名歌人との交流のあり、正寿尼にあてた彼らの書簡や、批点を加えた正寿尼詠草も多数残されている。こうした点を考慮して、正寿尼の文事を調査・研究の中心にすることにした。

## 2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」に記した「書簡の研究」以下の調査は、洛東遺芳館に所蔵されている文物のすべてにわたるものではない。未調査のまま残されている文物を調査して、すでに見いだされている資料とあわせて、柏原家と柏屋の人々の生活の跡を、年譜や目録などの形でまとめること、そして、それにもとづいて、柏原正寿尼を中心とする柏原家・柏屋の人々の文化と文化交流の実態を明らかにすることが、本研究の目的であった。「実態」の具体的な事例をあげるなら、柏原正寿尼の文事については、正寿尼はどのような機会にどのような歌を詠み、その歌を伴蒿蹊、加藤千蔭、香川景樹等の歌人はどのように批評したのか、それを正寿尼はどのように受け止めたのか、ということである。また文化交流については、柏原家と、姻戚関係にある岸部家吉田家、那波家、三井家等の商家との間に、どのような時にどのような物(絵、茶器等)や書簡、和歌のやりとりがあったのか、ということである。こうした調査と考察を積み重ねることによって、柏原家・柏屋の文化と文化交流の総体が、徐々に明らかになってくるのではないかと考えた。

## 3. 研究の方法

洛東遺芳館に出向き、所蔵資料の整理と調査を行い、各資料に仮番号を付して所蔵資料リストを作成し、それに基づき写真撮影した。持ち帰ったリストと写真にもとづき、仮目録と柏原家・柏屋年譜を作成した。それと並行して、正寿尼の「文事」のうち、詠歌についての考察を中心に考察をすすめた。まず、正寿尼の全詠草に資料番号を付し、そこに記されている全詠歌に歌番号を付けた。次に、それら一首一首につき、年譜を参照しながら詠作年次の推定を試みた。これには「香川景樹歌日記」(『桂園遺稿』上巻・下巻に収録)が有益であった。それとともに、初二句・四句索引を作成した。通常の初句・四句索引ではなく初二句・四句索引にしたのは、典型的な大量の歌を整理する際、初句・四句索引では歌を特定することが困難な場合がしばしばあるが、初二句・四句索引ならほとんどすべての歌を特定できることが、経験上わかったからである。正寿尼詠草には、伴蒿蹊、加藤千蔭、香川景樹、大江広海、小川布淑、熊谷直好などの批点がある。それらの批言、加点の有無、添削を拾い、データベース化した。これらの作業のいっぽうで、正寿尼の歌と蒿蹊、千蔭、景樹等の批言の読解、添削の意図の推測を試みた。諸家の批言の読解や

添削の意図の推測にあたっては、諸家の歌論にもとづいて批言や添削をみるのではなく、まず正寿尼の歌を理解し、そのうえで批言と添削を読む、そして批言と添削にもとづき歌論を解釈する、という方法を原則とした。また、正寿尼の歌と批言、添削の読解のために、年譜のほか、洛東遺芳館に所蔵されている書籍や蒿蹊、千蔭、景樹等の正寿尼宛書簡などを用いた。その際、書籍については正寿尼在世にすでに収蔵されていたものと没後に収蔵されたものを区別するため、天保年間から昭和にかけて作成された数種の蔵書目録を主な資料として、洛東遺芳館蔵書の形成過程につき考察した。また、諸家の書簡の執筆年次を正寿尼年譜、柏原家・柏屋年譜などを参照しながら考察した。そのほか、正寿尼の詠歌の読解に必要な諸資料につき、種々の調査研究を実施した。さらに、批点の読解に必要な、伴蒿蹊、加藤千蔭、香川景樹等の歌論について考察した。このように、正寿尼の和歌の研究を軸として、そのために必要な資料へと調査研究を広げていった。

#### 4. 研究成果

本研究の研究期間を通じて、洛東遺芳館所蔵の文物の中から研究課題に直接かかわる資料をさがしだすことに努めた。その資料は、次のように二つに大別することができる。

(1) 柏原家初代浅真、六代目内室栄寿尼、七代目正寛・正寿尼夫妻、八代目祐真・寿真夫妻などの柏原家の家族の文事にかかわるもの。

(2) 柏原家へ姻戚の吉田家、那波家、岸部家、三井家からもたらされた文物。

本年度までに確認できた(1)(2)の全資料を通覧して、その目録を作成し、柏原家・柏屋の生活と文化にかかわる年譜を作成した。目録としては、日記・旅日記目録、慶弔記録目録、柏原栄寿尼関係目録、柏原正寛詠草目録、柏原正寿尼詠草目録そのほかがある。従来これらはいずれも柏原家においては蔵書とはみなされず、近世以来作成されてきた柏原家蔵書目録からもれていた。このほか、吉田家、岸部家、那波家、三井家からもたらされた文物の目録も作成した。その成果の一部は、洛東遺芳館平成29年春期展示会「北三井家ゆかりの品々展」(平成29年4月1日から5月5日まで)の展示品の選択、解説に示した。年譜は柏原正寿尼年譜、柏原家年譜、柏屋年譜そのほかがある。これらの目録・年譜は洛東遺芳館所蔵資料にかかわる種々の研究の基礎になるものである。そうした研究の一つの成果の一部として、「伴蒿蹊の詠歌指導における「俗」―伴蒿蹊点柏原正寿尼詠草を主な資料として―」を執筆し、現在投稿中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----